

Short Report

## 韓国における農業経営者育成の取り組み

### 韓国ベンチャー農業大学の実践

渡部岳陽<sup>1</sup>, 藤井吉隆<sup>2</sup>, 上田賢悦<sup>3</sup>, 朴相賢<sup>4</sup>

<sup>1</sup> 秋田県立大学生物資源科学部生物環境科学科

<sup>2</sup> 秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科

<sup>3</sup> 秋田県農業試験場

<sup>4</sup> JA 福島中央会・福島大学

本研究では、韓国における優れた経営感覚を持った農業者を育成するための教育実践の特徴を韓国ベンチャー農業大学の事例に明らかにした。韓国ベンチャー農業大学では、第1に、スター農民を育てるという理念に沿って、受講生の入学審査と卒業認定が厳格に行われている。第2に、受講生に深く討論させるため、全ての講義が1泊2日で実施されている。夜半まで続く討論は、受講生同士で成功や失敗経験を共有したり、新たなアイデアを生み出したりできる貴重な機会となっている。第3に、農業、文化、芸術を融合させた創造性の開発を重視している。農業と芸術を融合させたイベントへの参加を通じて、受講生は彼らの自主性や商品アピール力を向上させている。このような特徴は、優れた経営感覚を持つ農業者を育成する手法として役立つものであり、秋田において取り組まれている次世代農業経営者ビジネス塾の運営方法にも大きな示唆を与えている。

**キーワード：**教育実践，人材育成，農業経営者，韓国ベンチャー農業大学，次世代農業経営者ビジネス塾

近年、大学、地方自治体や民間企業が主体となり、農業者を対象とした経営リテラシー教育を行う人材育成の取り組みが活発に行われている（木下 2014, 藤井 2017 など）。これらは、ビジネス感覚を持った企業的な経営体に発展させていく先駆的な農業経営者の育成を目的としており、農林漁業者や農業参入を目指す企業等が主な受講生となっている。秋田県立大学においても、秋田県とともに 2014 年度から次世代農業経営者ビジネス塾（以下、ビジネス塾）を実践している。しかしながら、研修事業予算の制約や資源の不足から体系的な継続性が不安定であり、具体的なプログラム構築手法が必ずしも体系化されていないという問題を抱えている。

そこで本研究では、民間主導の先進事例として 2001 年から始まった韓国ベンチャー農業大学の取り組みを事例に、その特徴を明らかにするとともに、

本県において取り組まれているビジネス塾運営への示唆を得たい。

### 韓国ベンチャー農業大学誕生前史<sup>1</sup>

韓国ベンチャー農業大学の取り組みを説明する前に、その誕生に至る経緯に触れておきたい。韓国ベンチャー農業大学は、元農村振興局長官である関勝奎氏の熱意と努力によって誕生した。同氏はサムスン経済研究所の主席研究員だった 1996 年、農村を訪問し、農作業のボランティアを行う中で、何をすることが農家や農村の役に立つのかを考えるようになった。そこで思いついたのが研究所の有するノウハウや知識の提供であった。同氏は、農協を通じて紹介してもらったとある農村にパソコン 30 台余りを寄付し、農民たちを対象にパソコン技術やマーケティング

ィング、経営戦略に関する講義を盆と正月を除く毎週土曜日に実施した。同氏以外にも研究所の研究者がボランティアに協力し、第1期は20名の農民が受講した。講義のうわさが広がり、全国から講義を聞くために農民が集まるようになり、第2期には数百人の受講者を数えた（第5期まで実施）。

講義を実施する中で、閔氏は家庭の事情で大学等に進ませてもらえず教育を十分に受けられなかったにもかかわらず、知識の習得が早く優れた能力をもつ農民も存在することに気づき、改めて農業分野における人材育成の重要性を認識した。同氏は、仕事として農業を営むことに対する暗いイメージを払拭するためにも、農業にベンチャー精神を取り入れることが重要であるとの認識に至り、2000年6月には農民250人余りと共にベンチャー農業フォーラムを立ち上げた。農業分野において活力を取り戻そうとする農民たちが、お互いにアイデアと情報を交換しながら人的・物的ネットワークを形成しようという趣旨であった。フォーラムでは全国を回りながらベンチャー農業を説明するシンポジウムを何度も開催した。シンポにおいて同氏は「ベンチャー農業とは、冒険・挑戦・情熱・エネルギーを持った農業人たちが新技術とアイデアを基に新しい市場を開拓していく農業」であると説明した。また、「集団的なデモや国民感情に訴える時代は終わった。政府の保護から離れ自ら変身することだけが生き残る道である」と強調した。

シンポジウムを実施する中で、参加者の多くからマーケティングや農業経営について学ぶ機会を設けて欲しいという声が続いた。閔氏は彼らに問いかけた。「学ぶ機会を設けても良いが政府の補助は一切ない。それでも学びたいか?」。この問いかけに賛同し始まったのが韓国ベンチャー農業大学である。

### 韓国ベンチャー農業大学の運営とその内容

閔氏は、専門家中心の質の高い講義を通じてスター（花形）農民を育成しようという目標を立てた。教育機関の名前は「韓国ベンチャー農業大学」に決めた。全国から学生たちが集まることを考慮し、1か月に1回（毎月3週目の土曜日）、年12回のカリ

キュラムとした。また深い討論を行う時間を確保するため、毎回1泊2日の日程とした。受講生の授業料は年間80万ウォンとし（現在110万ウォン）、運営費や受講生の教材費・食費にあてることとした。講師陣の確保について閔氏は、自らの人的ネットワークをフルに活用した。サムスン経済研究所の研究者、大学教授、企業のマーケティング実務者、法律専門家、放送局プロデューサーPDなどが講師として参加した。講師は基本的に手弁当である（謝礼は受講生らの農産物）。開学以来、現在まで講師としてボランティアに関わり続けているのは、閔氏をはじめ、ナム・ヤンホ氏（前韓国農水産大学総長）、クォン・ヨンミ氏（エイネットデザイン&マーケティング代表）、朴・ヘワン氏（エイネット特許法律事務所理事）、ソン・ミラン氏（錦山郡農業技術センター係長）などである。現在は、社団法人「韓国ベンチャー農業フォーラム」が大学を運営する形態をとっており、専任スタッフは2名、受講生による受講料や寄付金のみで運営費を賄っており、設立以来、政府からの補助金を受け取っていない自主運営である。

入学と卒業については厳しめの手続きが採用された。スター農民の育成が目的であるため、「可能性が見える」農業人だけを厳選することを原則としたのである。例えば、書類選考と面接を通じて、名刺やeメールを持っていない人は受講生として選抜しなかった。これは、ビジネスをする基本姿勢を持っているかどうかを判断するために作った基準の一つであった。卒業要件として出席率8割以上と事業計画書審査を義務づけた。その結果、第1期は受講生87名に対して卒業生27名、第2期は90名の受講生に対して卒業生40名と、卒業できない受講生も少なくなかった。第3期以降は受講申込者が急増したため、定員を150名とした（現在は200名）。さらに申込者をしぼり込むため、卒業生による推薦を入学の要件として付け加えている、それにも関わらず、多い時で定員の4倍、現在でも3倍の申込者数となっている。当初は年配の受講生が中心だったが、現在では受講生の3割を30代、4割を女性が占めており、受講生の平均年齢は40代である。卒業生の中には自分の子息を大学にいかせるケースも多く、本人、妻、息子、娘の4名が受講生となることもあるという。



図1 韓国ベンチャー農業大学における講義風景  
資料：キム・バンギョン（2016）より引用。

また現在の受講生の7割を農民、3割を農協関係者が占め、残りが公務員、農業志望者、Uターン者などである。ちなみに、これまでの卒業生は2,000名以上を数えており、「韓国農業において成功したと評価される農業者の半分はベンチャー大学出身」とのことであった<sup>2</sup>。

大学における初めての授業は、2001年5月27日、借り受けた忠清南道・錦山郡・濟原面のある廃校（旧金剛小学校）において行われた。初日は、農業における広報の重要性やベンチャー農業のためのデザインの理解について授業が行われ、受講生は放送局プロデューサーと専門グラフィックデザイナーの話に耳を傾けた。次の日、受講生は「韓国におけるベンチャー産業の展望と事業戦略」などの授業を受けた。その後、大学において行われた授業として、「新たな企業家戦略」「戦略的意志と創造的慧眼」「顧客満足管理の方案」「顧客ニーズと有望な商品のキーワード」「心を掴む顧客サービス」などがある。これらは関氏が、受講生に経営者として事業計画書を作り、製品デザインができるような経営マインドを身につけてもらうために考案したメニューである。関氏は、受講生の要望をふまえながら、毎回の授業メニュー

を考えている（最近では検事を講師として招き、法律関係の授業も行っている）。こうした座学的な授業を1日目に行った後、2日目には卒業生や学生による実践の発表会が行われている。

さて既に触れたように、大学では受講生間の「深い討論」を重視している。そのために設けている時間帯が、1日目の夕食後、深夜まで行われる討論会である。ちなみに毎回の食事の準備は卒業生がボランティアで行っている。受講生は大学内にある様々な同好会（演劇、歌唱、食品製造、写真、交流など）に所属するが、その同好会毎に分かれて提示された討論テーマについて、受講生同士でとことん議論しあうのである。受講生は都市や農村関係なく全国から多様な経験を持つ人たちの集まりであり、討論会の中では幅広く情報交換が行われ、面白いアイデアが次々と生まれてくるという。この討論会が終わり、宿泊する温浴施設であるチムジルバンに移動した後も、翌朝まで討論が続くことも少なくない。

さらにもう一つ、大学の実践として特筆すべきものが、農業と芸術の融合を通して受講生の創造性（クリエイティビティ）開発に繋げるようとする取り組みである。正規の事業とは別に、農業と芸術を融合



させた展示会、音楽会、演劇、ファッションショーなどのイベントを受講生自らが年に1回開催することになっている。例えば、ファッションショーの場合には、自分が栽培している農産物を素材としてファッションに取り入れる必要があり、自分の農産物を効果的に広報するための方法を実習する貴重な機会としてイベントを位置付けている。受講生には2ヶ月間の準備期間を与え、発表内容については受講生に一任しており、受講生の自主性向上にも一役買っている。

以上のような興味深い実践を続けてきた大学であるが、今日まで順風満帆に歩んできたわけではなかった。錦山郡から場所の提供を受け、大学は2003年に廃校から錦山郡農業技術センターへ引っ越しをした。しかし2012年、監査院から錦山郡へ「公共機関の施設を民間の団体に無償で貸してはいけない」という指導が入り、大学は存続の危機にさらされることとなった。他に講義を続けられる場所が見つからないと大学は廃校せざるをえない状況に陥った。その時、卒業生と在学生たちが立ち上がり、6億ウォンの寄付を集めた。200人を超える人から1万ウォンから4千万ウォンまでのお金が寄付された。卒業生の1人は、現在大学が位置している林野3300m<sup>2</sup>を安い値段で提供した。卒業生たちが自らの力で建物を建てて（建設監督業資格を有する人もいた）、2012年9月に大型の講義室と食堂を完備した現在の教育拠点が誕生するに至った。

### まとめとビジネス塾への示唆

以上、韓国ベンチャー農業大学の特徴をまとめると以下の諸点になる。第1に、スター農民を育てるという理念のもと、受講生の入学審査と卒業認定とともに厳格に行うとともに、高額を受講料納付を受講生に課している。第2に、専門家による中身の濃い講義に加えて、受講生同士の深い討論を実現するため、年間12回の全ての講義が1泊2日で実施されている。夜半まで続く討論は受講生同士の学び合いや成功・失敗経験の共有など、単なる座学では得られない貴重な機会となっている。第3に、農業と文化・芸術を融合させた創造性の開発を狙っている。

受講生に農業と芸術を融合させたイベント参加を課すことにより、彼らの自主性や商品アピール力の向上へ結びつけている。

このような特徴は、優れた経営感覚を持つ農業経営者を育成する手法として参考となるものであり、近年秋田でも取り組まれている次世代農業経営者ビジネス塾の運営方法にも大きな示唆を与えるものである。筆者らを中心として2014年度から取り組まれているビジネス塾は試行錯誤を重ねながら今日に至るが、①一流の農業経営者を育てるという理念、②農業経営に必要なマネジメント力向上を重視、③グループディスカッションを取り入れた講義スタイル、等の諸点においては、韓国の取り組みと共通する点を見いだせる。とはいえ、運営予算やマンパワー、会場確保等の制約により、宿泊型研修による更なる深い学び合いの機会の提供や文化・芸術面の工夫を施すまでには至っていない。今後はそうした取り組みについても、導入の可能性を吟味しながら、ビジネス塾に取り入れることも検討されてよい。

### 文献

藤井吉隆・渡部岳陽・上田賢悦(2017)「農業経営者人材育成支援への取り組み—未来農業のフロンティア研修・次世代農業経営者ビジネス塾の事例—」『秋田県立大学ウェブジャーナル A』4, 46-54.

キム・バンギョン(2016)「設立15年、韓国ベンチャー農業大学が歩んできた道—“奉仕精神で情熱と感動の実を収穫”」、『月刊中央』, 2016年5月号, URL :

<https://jmagazine.joins.com/monthly/view/311110>

(最終閲覧日:2017年6月14日).

木下幸雄・木村伸男(2014)「農業経営者向けリカレント教育プログラムの開発と実践」『農業経営研究』52(1・2), 13-20.

### 注

<sup>1</sup> 以下の内容はキム・バンギョン(2016)に多くをよっている。

<sup>2</sup> 2016年8月30日に行った関氏への聞き取りによる。

〔平成29年6月30日受付〕  
〔平成29年7月11日受理〕

## Educational Practice for Human Resource Development of Agricultural Managers in Korea

: The Case of Korea Venture Agriculture College

---

Takaaki Watanabe<sup>1</sup>, Yoshitaka Fujii<sup>2</sup>, Kenetsu Ueda<sup>3</sup>, Sanghyun Park<sup>4</sup>

<sup>1</sup> *Department of Bioresource Sciences, Faculty of Biological Environment, Akita Prefectural University*

<sup>2</sup> *Department of Bioresource Sciences, Faculty of Agribusiness, Akita Prefectural University*

<sup>3</sup> *Akita Prefectural Agricultural Experiment Station*

<sup>4</sup> *Fukushima Prefectural Union of Agricultural Co-operatives / Fukushima University*

In this study, we examined the characteristics of Korean educational practice to develop agricultural managers with a good business sense, using the example of Korea Venture Agriculture College (KVAC). At KVAC, first, in accordance with a philosophy of developing “star farmers,” students’ entrance examinations and graduation certification must adhere to strict guidelines. Secondly, all lectures are held over two days and one evening in order to facilitate deep discussion. This discussion, which continues until midnight, is a valuable chance for participants to share successful and failed experiences among the members and put forward new ideas. Thirdly, KVAC emphasizes the development of creativity in which agriculture, culture, and art are fused. Members develop autonomy and the appeal of agricultural products to potential buyers through participation in an event which fuses agriculture and art. Such features are useful as a method to nurture agricultural managers to have excellent business sense, and provide important suggestions to the management solution of Next-Generation Farm Manager Business Training in Akita prefecture.

**Keywords:** Educational Practice, Human Resource Development, Agricultural Managers, Korea Venture Agriculture College, Next-Generation Farm Manager Business Training